

熟塾バスツアー

国宝の十一面観音と芳洲庵・近江商人の故郷を訪ねて

渡岸寺の国宝十一面観音と雨森芳洲庵・

近江商人の故郷五個荘を訪ねる湖北路バスツアー

2007年 5月12日(土) 午前8時～午後7時

講師：郷土史家 伊ヶ崎淑彦氏

行程：大阪駅集合～渡岸寺“国宝十一面観音”拝観
～ 雨森芳洲庵(芳洲弁当の昼食) ～ 近江商人の里 五
個荘 近江商人博物館・重要伝統的建造物群保存地区“金堂の
町並み”近江商人屋敷散策～大阪駅・難波・天王寺駅解散



渡岸寺国宝十一面観音：奈良時代、聖武天皇の勅願により、泰澄が十一面観音立像を刻んで観音堂を建立、その後最澄が七堂伽藍を建立し栄えた。戦国時代、浅井・織田両軍の戦いで、寺は焼失したが、本尊の十一面観音立像は土中に埋められて災禍を免れたと伝えられる。高さ1.95m、平安初期の一木造で、井上靖の『星と祭』や水上勉の『湖の琴』、土門拳の写真などにより全国的に有名。眉から鼻へかけて

の線は秀麗かつ気品に溢れ、腰を少し左にひねった姿勢は官能的で、小面の配置に特徴があり、両耳の大きな耳とうがインドや西域の作風を伝えている。

天候は快晴、正に五月晴れ。連休明けの快い風に乗ってバスは天王寺・大阪駅経由で一路近江路をバスは直走る。二時間後、バスは渡岸寺の駐車場にバスが停車。小川のせせらぎ沿いにゆっくりと歩いて渡岸寺の保存庫へ。中には長身の観音様にお迎えいただいた。で御任職からお話を聴いた後、観音様の周りをぐるりと歩いてみる事ができる。360度どの角度から見てもすきのない美しいお姿で、長く細い手に右足を一步前に出して今にも歩みだそうとするお姿は見飽きることがない。特に後ろから見た姿が幼い頃に仰ぎ見た母の後姿に似て思わず思慕の思いに胸が熱くなった。また十一面のうち後方の観音面が邪気に溢れた不可思議な面持ちが人間の様々な感情を表しているかのようだった。かって戦火を避けるために土に埋めた為に金箔は剥がれたというが、この美しい仏様をどうしても救いたい。愛しい人を抱くように助け出したのではないかと大事に扱われたのだろう大き



な損傷もなく、そのお姿を今に伝えている。国宝として優美で官能的で更に気高い観音様のお姿を暫し、時間を忘れて見入っていた。高月町は観音の里として、多くの観音像が現存、村々に祀られている。

雨森芳洲庵：平井重彦館長の解説付き

朝鮮通信使が経由した対馬藩の高月町出身の儒教者(1668～1755)。1990年来日した韓国の盧泰愚(ノテウ)大統領(当時)が宮中晩餐会で、芳洲の名と270年前に彼の説いた交隣提醒(こうりんていせい：互いに欺かず、争わず、真実をもって交わる)という「誠意と信義の交際」を挙げ、「今後の両国関係も相互尊重と理解の上に発展するでしょう」と語ったのが切欠となり生家後に芳洲を顕彰する施設が建設。以来、韓国の中・高校生のホームステイを受入れ民間外交の拠点「東アジア交流ハウス」としても活動を継続。5月中旬には対馬から送られたナヅメソウの白い花を楽しむことができる。バスは、10分程田園風景の中を走り、小さな集落到り着く、そこで平井館長のお出迎えを受け、神社の大きなイチョウを眺め、庭先を花で下がる民家や綺麗な流れをたえた水路には鯉が泳ぎ、竹の筒にも可愛い花が植えられていた。水路にそって約5分、新緑に包まれた雨森芳洲庵の前に。そこ集合写真をパチリ。



館内では庭に咲くナヅメソウの白い花を眺めながらお茶をいただき、スライドを見ながら平井館長の名調子で芳洲の歴史と、20年にわたり毎年韓国から高校生を各家に受け入れ約二千人がホームステイ。正に民間外交、この村の取組みは数々の村おこしの賞を受賞しているようだ。五月には大きな鯉を泳がす



など村が一丸となって新しい取組みも行っている。館内には、芳洲の像が床の間に鎮座し遺徳を偲ぶ人々を静かに迎え入れる。通りや水路が綺麗なのは、家だけでなく、この村は自分たちのもの、まるで部屋を繋ぐ廊下のように通りをみんなが掃き清めているといった感じ。古き良き日本のコミュニティーが芳洲の思いと共に生きているのを実感。



昼食：芳洲弁当

芳洲の故郷・高月町の地元の田畑や琵琶湖の魚菜を味わうことが出来る食事処「なかに」の三段弁当。

TEL 0749-85-2041



③近江商人発祥の地“五個荘”：ボランティアがト付

江戸時代後期に呉服・太物・編笠・麻布（高宮布・野洲晒）を中心に、三都（江戸・大坂・京都）、関東、信濃、奥羽、畿内、九州を商圏として、村方（在方）として農間余業として商業をおこなった。売手よし、買手よし世間よしの「三方よし」等の家訓を残し、明治以降には海外への視察・進出など進取の気性に富む五個荘出身の近江商人を輩出。

高月町から五個荘へ。高月町でのんびりしてしまい、更に、途中道路が停滞するなど、予定よりも遅く五個荘に辿り着いた。てんびん棒こそ担いでいなかったが、近江商人に習って走り回って、時間内にか屋敷を観て回るようになった。更に慌ててKさんを置き忘れてバスを発車させ、その後を自家用車で参加した下野さんが



ハンドル捌きもよく追いかけるなど、ちょうど開催されていた特別企画“”商家に伝わる武者人形めぐりの人形を眺めながら、静かな五個荘の町を賑やかに大急ぎで見ていることになった。

近江商人博物館：近江商人を知る第一歩。映像やジオラマを用いて、五個荘の歴史、近江商人の商法や家訓、暮らしや文化、教育などさまざまな角度から紹介。同時展示に日本画家三輪良平展の京都の舞妓さんの絵も鑑賞。

「藤井彦四郎邸」藤井彦四郎（1876～1956）は、近江商人の三代目藤井善助の次男として生まれ、後に分家して藤井毛糸を創業。当時、珍しかった人造絹糸や「小町糸」の発売、「スキー毛糸」の製造販売など時代を敏感にとらえて、一代で成功した。屋敷地には、藤井彦四郎自信の構想で珍石、名木を配し、琵琶湖を模した池を中心に設けた池泉回遊式の大庭園をはじめ、主屋、客殿、洋館、土蔵が建ち並んでいる。



「中江準五郎邸」

昭和初期、朝鮮半島や中国で三中井百貨店を築いた中江家4兄弟の末の準五郎の本宅。明治38年（1905）、朝鮮大邸に三中井呉服店を創業し、昭和9年（1934）に株式会社三中井百貨店となる。蔵の中には五個荘が生んだ郷土玩具・小幡人形と全国の土人形を多数展示紹介している。

「外部宇兵衛邸」初代外宇兵衛（1777～1820）は、近江商人であった六代目外村与左衛門の末子。後に分家し、文化10年（1813）に独立経営。主に呉服太物を商う。明治期には全国の長者番付に名を連ねる。明治29年（1896）ころの隆盛時には、



2,720m²の敷地に主屋、大蔵など、蔵が十数棟が建ち並んでいた、母屋は万延元年（1860）築。外村繁邸の本家にあたる。ボランティアがトさんの案内で屋敷内や外観などを見学、米川さんは早速帳場に座り込んで算盤勘定。更に床の間にはお屋敷に伝わる江戸時代の「秀吉公内陣飾り」



「外村繁邸」

明治28年（1895）、四代目外村宇兵衛の妹みわに婿養子吉太郎（1868～1953）を迎えて分家したのが始まり。東京日本橋と高田馬場に呉服木綿問屋を開き、活躍した。吉太郎の三男は、私小説家として知られる外村繁（1902～1961）繁は、一時家業を継ぎ商人となるが、文学を志し弟に実家を託す。「草筏」「筏」「花筏」など近江商人を題材にした小説や自らの人生を綴った数多くの作品を残した。



重要伝統的建造物群保存地区“金堂の町並み”散策途中街角のたて看板にも近江商人の心意気が生きていた。**六心の訓** 1、はい（素直な心）2、すみません（反省の心）3、ありがとう（感謝の心）4、私がいけません（奉仕の心）5、どうぞ（互譲の心）6、おかげさまで（謙虚な心） 五個荘

参加者（敬称略）

一般：伍芳・木村正治・浜田真弓・原田芳子・丸山公子・丸山賀子・宮本雅彦

塾生：大森史子・北原祥三・下野譲・田中稔三・中村孝夫・原季美子・原田彰子・原田貴志・東口恵子・平野康子・堀内紀江・宮本麗子・森欣子・森川千世子・米川俊信